さつみ・古屋垣外遺跡

中央道埋蔵文化財発掘調査報告書

1970.3

日本道路公団 名古屋支社

飯田市さつみ遺跡

長野県飯田市上飯田　902～908番地

飯田市古屋垣外遺跡

長野県飯田市上飯田　6585番地

調査期間　昭和45年３月１日～３月31日

発掘調査委託者　日本道路公団名古屋支社

発掘調査受託者　長野県中央道遺跡調査会

発掘担当者　大沢　和夫

さつみ・古屋垣外遺跡調査団名簿

団　長	大沢　和夫	日本考古学協会員
専任調査員	佐藤　甦信	〃
〃	遮那藤麻呂	長野県考古学会員
〃	木下平八郎	〃
〃	土屋　長久	〃
調査員	今村　善興	日本考古学協会員
〃	宮沢　恒之	〃
〃	伴　信夫	長野県考古学会員

Ⅰ　環　　境

1.　さつみ遺跡

さつみは飯田市上飯田羽場８区902～908番地を中心とした地帯である。円悟沢井が幅20ｍ、深さ５ｍの谷をなして東流している右岸の台地上に立地しており、海抜540　ｍである。

ここは旧円悟沢井の作った微かな扇状地上に立地している。したがって古い時代にはしばしば旧円悟沢井の氾濫した所であると考えられる。今日１～２°の東面した緩傾斜地となっている。

円悟沢井は平安時代末期の開さくと推定されるが(1)　この井の設けられる前にも小さいが河があったのを利用したものである。飯田松川の作った古い段丘面（それは平坦な正永寺原で、その先端に元山白山社がある）と風越山中の一峰正永寺山の麓に発達した新らしい扇状地の間を流れ下った小さい川があった。その流路へ人工の円悟沢井を落したものである。それでもとの小川を筆者は旧円悟沢井と名づけた次第である。

さつみ・古屋垣外遺跡図（図１）　１さつみ　２古屋垣外

本遺跡の西北300ｍの湯渡遺跡は、古くよりよく知られた縄文早・前・中・後晩期　より弥生時代・須恵時代にかけての遺跡であり、特に縄文後期土器の出土が多い。(2)　また本遺跡の東北300ｍの方角東よりは弥生式時代の住居址が発見され佐藤甦信・木下平八郎らによって調査された。また前述の元山白山社は北に1535ｍの風越山の頂上を仰ぐ位置にあり、古社と考えられ、その社前あたりは早く開けた古水田地帯であると考えられる。(3)　また鎌倉時代の東山道はこのあたりを通過したとも推測せられる。

1.　筒井　泰蔵　飯田台地の水利、伊那　１９６８－５月

2　長野教育委員会　新産都市等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書　昭和４１年度

3.　１に同じ

2.　古屋垣外遺跡

古屋垣外遺跡は飯田市上飯田6585番地、通称丸山４区にあり、海抜540 ㎜。２°～３°の傾斜をもつ押洞川（たるの沢ともいう）の扇状地の端に立地している。遺跡のすぐ西に山の田井が流れていて川底との比高４㎜である。風越山の一峰虚空蔵山（1113㎜）をすぐ西北に仰ぐ地で川岸の小台地ともいうべき地である。

山の田井とは筆者が仮につけた名称で、土地の人に問うてもはっきりした川の名も聞くことができなかった。ただ地形的にみれば押洞川の扇状地とその西の滝の沢の扇状地の中間の裾合の低地で、両方の扇状地上を流れる小流（いずれも灌漑用水となっている）の落ち水が集って流下しているという川で、本遺跡のすぐ下で滝の沢川に合流している。筒井氏によれば丸山地籍で最も早く水田化された地域である。(1)

本遺跡の対岸山の田井を距てた小字堤地籍よりは弥生式土器・土師器・須恵器が発見されており(2)また本遺跡の東方300㎜の三つ見堂よりも筆者は弥生式土器を発見している。(3)　けだし虚空蔵山麓に発達した扇状地末端の水流を利用して早くより農耕がはじまっていたことを物語っている。

本遺跡の北方に城山があり、近くに宿の地名を残しており、伝承ではあるが飯田郷開発の主近藤六郎周家の居宅跡というのも近い点よりみて中世的なにおいの強い地帯でもある。

1.　筒井　泰蔵　　飯田台地の水利
　　伊那　　１９６７－12月号

2.　長野県教育委員会　　中央道建設地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書
　　昭和４２年度

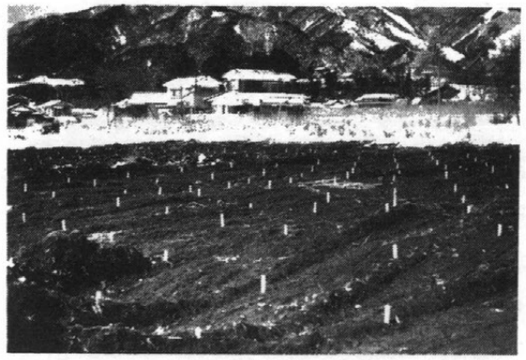
3.　長野県教育委員会　　新産都市等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書
　　昭和41年度

II　調　査　経　過

1.さつみ遺跡

中央道遺跡発掘調査が長野県で最初に行なわれるようになったのが飯田市上飯田さつみ、古屋垣外の２遺跡である。３月３日　本調査のために長野県中央道遺跡調査会が組織され、調査団が結成された。

３月４日に準備にかかり、５日には前夜からの25㎝の積雪と遺跡を埋めていた枯草を除去するためブルトーザーによって２遺跡の表土を排除する。



グリット杭打ちを終えたさつみ遺跡（写真１）

３月６日　さつみ遺跡に２㎜×２㎜のグリットを設定をする。道路公団との調査契約によると、さつみ遺跡はトレンチ工法による部分発掘で全面積約1400㎡の中５分の１の調査にとどまることになっており遺構を確認し、この調査結果によって再契約をするという変則的な調査である。

グリット設定は路線を横切る道路の南西側をＩ調査区とし、ａ～ｋ列、１～27列のグリットで、道路の北東側をII調査区としたａ～ｋ列、１～８グリットを設定した。

３月７日、さつみ遺跡において神事による鍬入式を行ない、いよいよＩ調査区より発掘調査にとりかかった。

鍬入れ式（写真２）

第Ｉ調査区

Ｉ区の調査に12日までの６日間を要した。さつみ遺跡の地層は少なくとも２～３回の風越山山麓の山崩れによる砂をかぶり、各グリットにより層位を異にしている。砂の堆積も２㎜離れたグリットで全く違った様相を示しており、砂の堆積層が１層だけのところ、２～３層のところがあり、遺構は砂層を切って黒土層のおちこみをもつもの、砂層の下に遺構をもつものがあり、その遺物は時代的に同じとみられるという状態で調査に苦労した。

調査はグリットの第１列より、３列、５列……の順に一つとびに掘りすすめたが、地層の複雑さのためはじめは遺構を掘りこみ、その一部を破壊する不手ぎわを犯すこともあった。ｋ３に１号住居址・ｂ３・ｄ３に２号住居址をようやくにして確認したものである。

地層についてはっきりするに従い遺構の検出も適確になり、ａ９・ｃ９に４号住居址を検出し、ａ９に中世火葬墓を、ａ５に円形土坑を発見し、つぎつぎに遺構を検出した。

調査をａ、ｂの縦列から１、２の横列にも拡めると同時にａ列の北西側に墳墓群の存在が予想され　ｍ、ｎ、ｏ列グリットを設定調査する。この増設グリット１～15列には宋銭を伴う火葬墓が発見され、中世火葬墓群、近世火葬墓群Ｉの存在が確かめられた。

ｇ19・ｉ19に住居址５号が検出され、ｉ列21～25には周構ともみられる溝が検出され、これは、II調査区でｉ列に連がることがわかった。また23～25列には宋銭をもつ火葬墓や土坑が検山され、ここに墳墓群IIの存在が確かめられた。Ｉ調査区発掘調査グリット数52である。

第II調査区

３月12日より調査にかかり15日までさつみ遺跡を完了させる。34グリットについて調査を行なうが遺構の関係で１部は部分発掘で終るものもあった。縦はａ、ｃ、ｅ……例、横は奇数列と一つとびに調査することにした。

はじめのａ・ｃ列を掘り、ａ１、ｃ１に立石及び古銭を伴う火葬墓を検出し、４・５列に住居址を発見、住居址のプランを見るため全面発掘をし、６号住居址（土師）とする。ついでｅ・ｇ列を調査各グリットに土坑、火葬墓をもちｅ７に７号住居址の１端を検出ｄ８・ｆ８とｆ９、ｅ９の上部を掘り住居址プランをさぐった。ｅ５、ｇ１には砂層下部145㎝の黒土層に炭を含み調査する。ｅ５には土坑をもつが遺物はなく、遺構もみられなかった。

ｉ列にはＩ調査区から続く溝があり、さらに東に向う溝をｋ３で発見する。２列を最後に調査し宋銭２個と火葬墓２を検出する。発掘グリット35、この調査区で検出された火葬墓、土坑が19基、住居址２個、この全区域に遺構が存在するものとみられた。

2. 古屋垣外遺跡

3月17日午前中さつみ遺跡より器材運搬、発掘準備をなし、グリットの設定をする。2m×2mのグリットを縦にa～f列、横に1～20列を設け、a列に平行して2m×20mのトレンチを西側に設定する。

公団との契約によると44m²になっていたが実際面積は520m²あり、このため遺構の存在をたしかめて調査をすすめることにした。午後より調査にとりかかるが、地層はさつみ遺跡と同様で氾濫堆積の砂層がいり混り、調査に苦労する。a1，3とa5に住居址壁面と床面を検出し、拡張して掘りあげる。弥生後期住居址1・2号とする。2号住居址の上部にa、bの境に列石があり近世の新しい陶器片を伴出するのが遺構とみるより、畑の石を集めて埋めたものとみられるものと考えられた。これと同じ線上にb9・b10に列石があり陶器片を伴出する同じ性格のものとみられた。

d3～d7に列石があり、前記と同じものとみて調査したが、これは径60cm位の円形に拳大の石を積み上げた独立したものとなり、さらに調査をすすめ、火葬墓群であることを確認した。C3には2つの土坑を、C5には石を並べる形態の火葬墓1を検出した。11列以東には僅かな遺物を見たが遺構は検出されなかった。15・16列に深い黒土のおちこみがあり、調査をすすめたが新しい果樹園の消毒パイプの埋めこみの溝であった。トレンチ－8に土坑を検出し、－9、－10に住居址の壁面と床面を検出し、拡張して調査し、弥生後期住居址の全貌をみることができた。トレンチ－1～－7には砂の堆積で、遺構も遺物も発見できなかった。

古屋垣外の発掘風景

古屋垣外の遺構

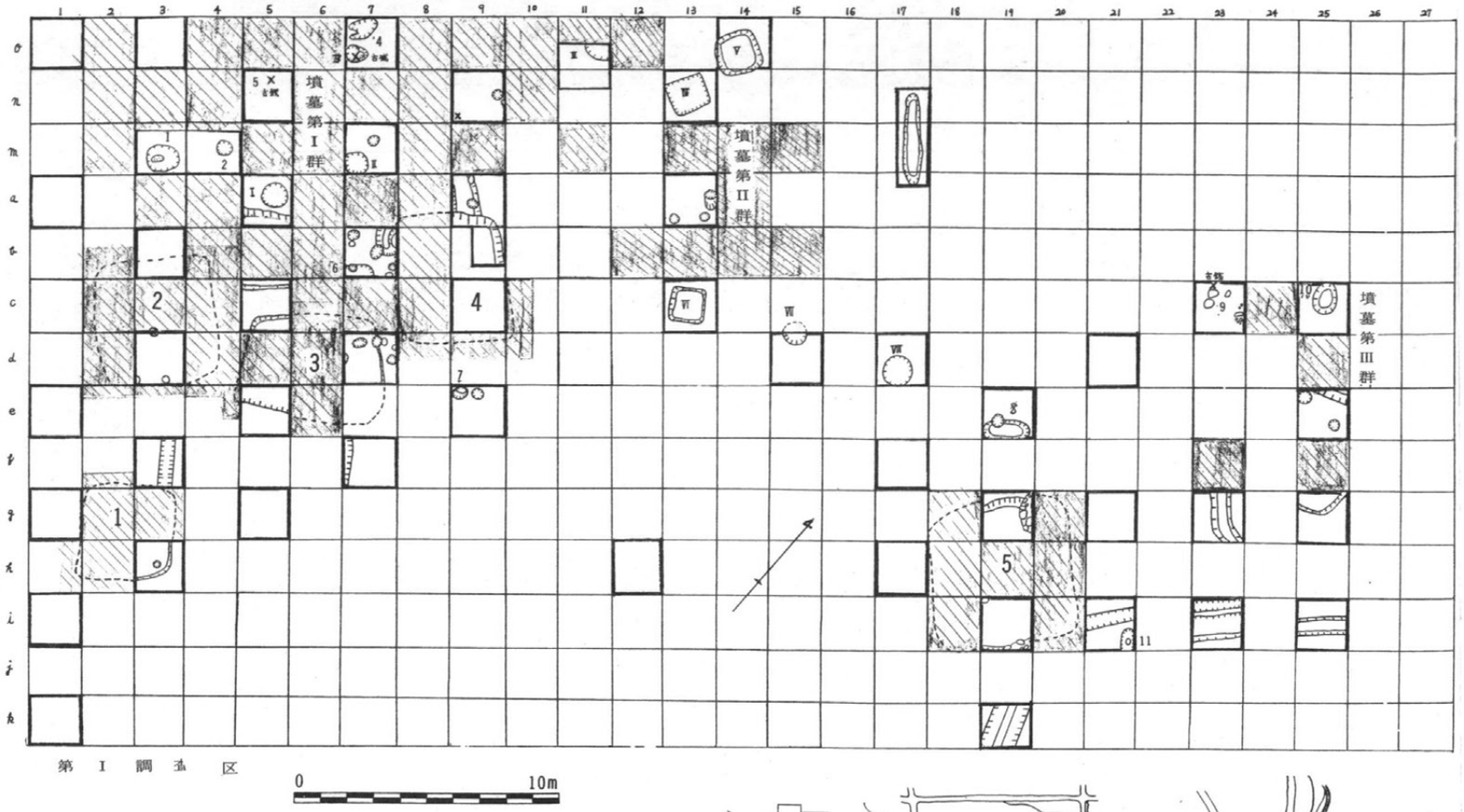
3月19日には、道路公団名古屋支社の鈴木調査役、県教委林指導主事が遺跡発掘状況を視察した。

3月21日遺構の清掃、写真、実測をなし、現場における調査を完了した。調査面積は、72m²、18グリットで住居址3、中世火葬墓14基と土坑1を検出し、全面発掘の成果を上げえた。

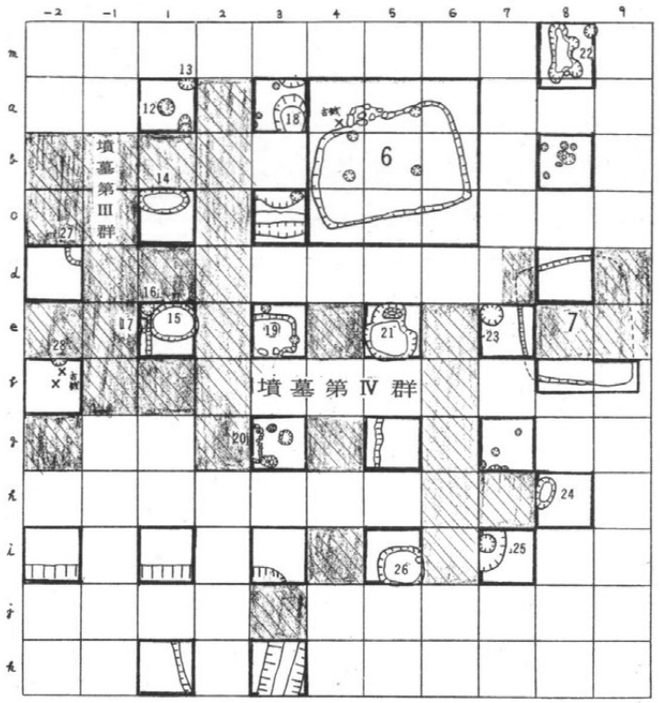
調査期間中を通じ3月にしては異状な天候で連日厳寒中の寒さと吹雪、強風になやませられながら調査を続行したもので16日の雨に1日現場作業を休んだのみの苦難の調査であった。

現場調査終了後、休日なしに遺物整理、製図、報告書の作成にとりかかる。

日本道路公団鈴木調査役の視察



第 I 調 査 区

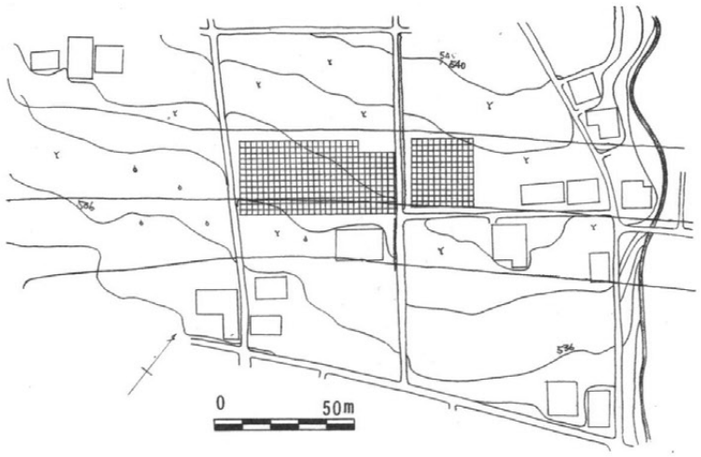


第 II 調 査 区

さつみ遺跡遺構図

（図２）

さつみ遺跡グリット設定図



さつみ遺跡全景

Ⅲ　さつみ遺跡の遺構及び遺物

Ⅰ　住　居　址

(1)　1号住居址　h 3グリットの深さ112 ㎝に壁面とが8㎝おちこむ床面と　柱穴1個を検出したもので、遺物は打石器と弥弥生式土器片を床面で発見している。f1･h2･g1･2につながるとみられ調査を要す。規模からみて中島式の住居址と考えられる。この住居址につながるものとみられるV字構（巾60㎝、深さ20㎝）がf 3にあり、この関連を調査するためg 4・h 4・5の調査が必要である。

(2)　Ⅱ号住居址　b 3・d 3に発見されたもので、この遺跡の最初の調査のため見分けがつかず人夫が床面を切りこんだ後に発見したものであり、深さ65㎝に床面がありd・e 3グリットの境に壁をもつものとみられる。b・c・dの3列b・c・dの4列、e列の2.3.4 につながるとみられ調査を要す。遺物は須恵器片と縄文後期片をみており、形態からみて平安末の住居址と考えられる。

(3)　Ⅲ号住居址　C 5に東に向くおちこみとe 5の北西に向くおちこみがあり、（これは人夫によりⅡ号住居址と同じに切りこまれた後発見した。）d 7に南西に向くおちこみがあり、壁面、床面、柱穴が検出され住居址を確認したもので、遺物は良質な青磁陶片、灰釉陶器片、鉄滓の出土をみており、平安期の特別な住居址とも予想されるd 3・c 6・c 7・e 4・e 6・e 7の調査が必要である。

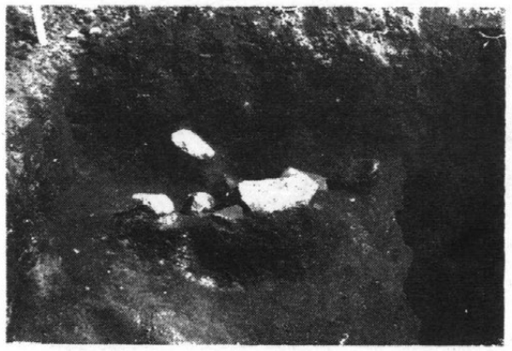
(4)　Ⅳ号住居址　a 9・b 9に壁面と床面を検出し、C 9に深さ90㎝の床面を検出している。遺物は弥生式とみられる土器片、鉄片と鉄滓の出土をみている。形態からみて弥生後期のものとみられるが遺物が少なく確認できない。住居址は完全に残り、b 7の北東隅に壁面がわずかにみられている。

a 7、a 8、b 8、b10、c 7、c 8、c10、d 9、d 10を調査し住居址を完全に調査する必要がある。a 9グリットのⅣ号住居址の北西には壁上に浅いおちこみをもち柱穴もみられ、縄文後期土器片、磨石の出土をみ、縄文後期の住居址を切ってⅣ号住居址が構築されたとも考えられ、n 9には縄文後期土器の4分の1個体が検出されており、a 6、a 7、a 8、m 8、m 9、n 7、n 8の調査も必要である。

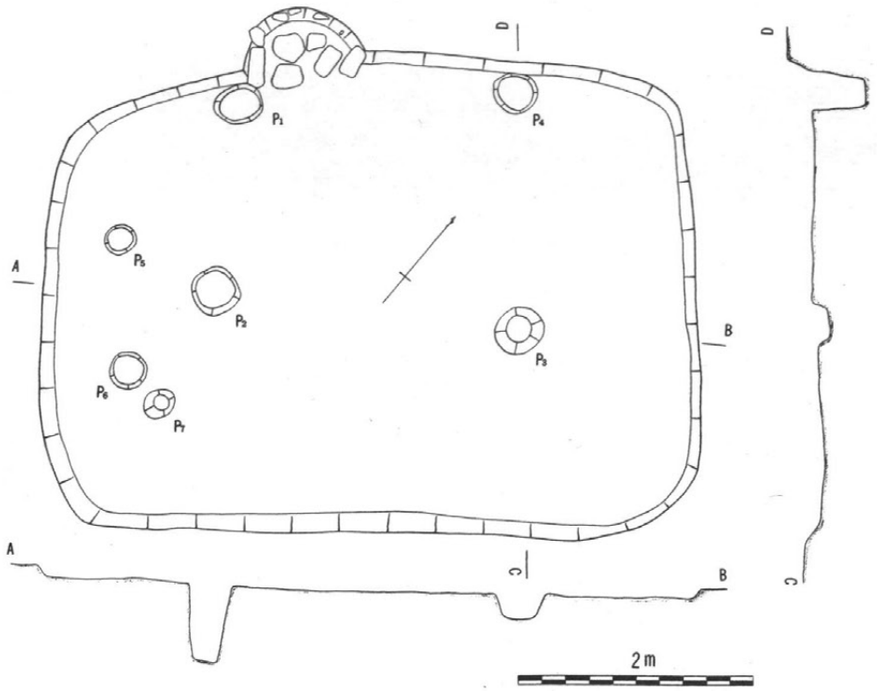
以上4住居址は地層上の見分も困難なものであるが、その性格も複雑であり、これを究明することの意義は重要である。

(5)　V号住居址　g19・i 19に発見されたもので、g19にはカマド（写6）とみられる石組をもち、i 19の北東隅にも石組をもち遺物は須恵器片、灰釉陶器片が検出されており平安期の住居址とみられる。g18・g19・g20・i 18・i 20の調査の必要がある。

(6)　Ⅵ号住居址（図3）　Ⅱ調査区のa・b・cの4．5．6列に位置し、全面を発掘したものである。東西3.5 ㎡、南北5.5 ㎡の長方形隅丸の住居址で北壁にカマドをもつ主柱穴4個と支柱穴3をもち主柱穴は北壁ぎわにP 1･P 4の2個他の2個p 2･p 3は住居址のほぼ中央よりに西



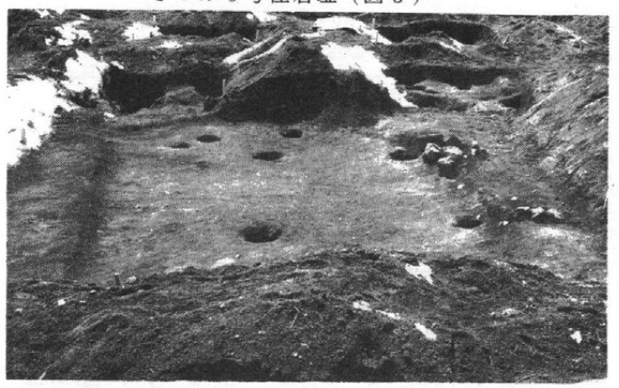
さつみ5号住居址かまど（写真6）



さつみ６号住居址（図３）

東壁より１ｍ～1.5 ｍの距離にある変則的なものである。

遺物は国分期とみられる土師器で平安末の住居址とみられる。須恵器灰釉陶器の出土はなく、遺物は極めて少なく、おそらく移転した後の住居址と考えられる。本趾を切る土坑がみられるが、今後の調査にまちたい。特にカマドの南側より紹聖元宝が検出され、火葬墓の存在が予想される。



さつみ６号住居址

(7)　Ⅶ号住居址　Ⅱ調査区ｄ８・ｅ７

ｆ８に発見された住居址で、ｆ９の上層部の上をはねプランを確かめたもので、およそ東西4.5ｍ、南北４ｍの大きさとみられる。遺物は山茶わん片を壁上で検出したのみであるが、平安末の住居址と考えられるｄ７・ｄ９・ｅ８・ｅ９・ｆ７・ｆ９の調査を必要とするものである。

2.　土坑及び火葬墓

土坑には楕円形の径120㎝～180㎝×70㎝～140㎝で15㎝～30㎝の浅い掘りこみをもつ縄文後期か弥生後期とみられるものと、径90㎝～110㎝の円形または一辺が130㎝～140㎝の方形の深い穴を掘りこんだ近世土葬墓とも考えられるものがある。この二つの性格は構築方法において全く異なる様相を示すものである　がいずれも時代を決定づける遺物がみられない。後者においては近世土葬墓の場合、今までの例によると　人骨は形をなしており、寛永通宝の六文銭やキセルを伴出しているが何も遺物をみないことはその性格を究明すべき問題点であり、再発掘する必要がある。

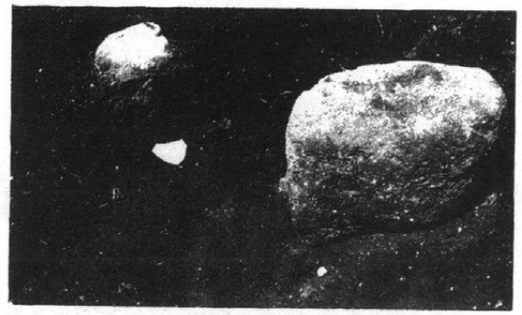
火葬墓とみるものは径40㎝～60㎝大の土坑をもち、①土坑のみのもの　②土坑のまわりに石をつめる　③中に石を置く、またはたてる　④石を並べるの４形態がみられる。土坑内に中世陶片をおくものや古銭が入れられたものがあり炭が中に入れられているか火葬骨片、骨灰は検出されていない。しかし形態からみて明らかに中世火葬墓である。

これらの土坑、火葬墓が点在するものでなく、一つの群をなして存在するものとみられる。ｂ、ａ、ｍ、ｎ、ｏ列の２～10列にある１群＝墳墓第Ⅰ群、ｏ～ｅの11～19列に存在する土葬墓を主体とする１群＝墳墓第Ⅱ群、ａ～ｆの22列より第Ⅱ調査区４列に連がるとみられる中世火葬墳を主体とした１群＝墳墓第Ⅲ群、第Ⅱ調査区の全域にみられる土坑を主とした墳墓第Ⅳ群を上げることができる。

(1)　墳墓第１群

２．３．４号は火葬墓とみるもので土坑のみのものであるが２号よりは美しい緑色をなした青磁系の陶器片が底部にはいっており、３号よりは古銭―腐蝕して字の不明なものが入っていた。ｎ５の５号は土坑がはっきりしなかったが大観通宝１個が検出されＯ５につながるとみられる。

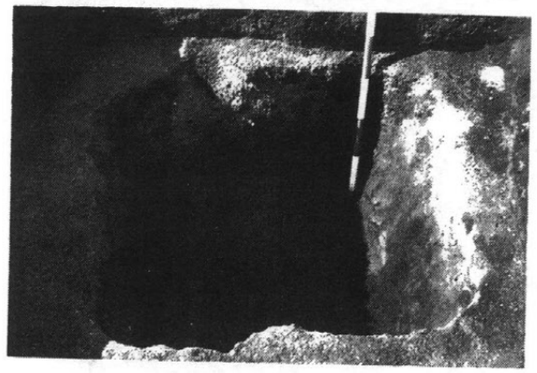
Ｏ３よりは大形のオロシ皿―古瀬戸焼片が出土し、この北西側に火葬墓の存在が予想される。１号は上部に焼土の塊をもつ特殊な土坑で遺物は縄文後期土器片が検出されている。６号土坑は１部分の発掘で今後の調査を要する。Ⅰ・Ⅱ号墳は径90㎝の整った円形で垂直に砂層を67㎝と38㎝の深さに掘りこんだものであり、墳墓第Ⅱ群にはいると考えられる。第Ⅰ群は中世火葬墓を主体とするもので、この区域での遺物は良質な中世陶片と宋銭であり、中世前半の火葬墓とみられるもので、この全域を調査し火葬墓群の性格を明らかにすることは飯伊地方の中世解明のためにも重要なことである。



さつみ２号火葬墓（写真８）

(2)　墳墓第Ⅱ群

Ⅲ号～Ⅷ号の土葬墓とみる方形の大きな土坑をもつⅣ・Ⅴ・Ⅵ号は方形Ⅲ・ⅦⅧは円形で50㎝～70㎝の深さをもつⅣ号の方形土坑は砂層より80㎝の深さをもち垂直に掘りこまれたもので



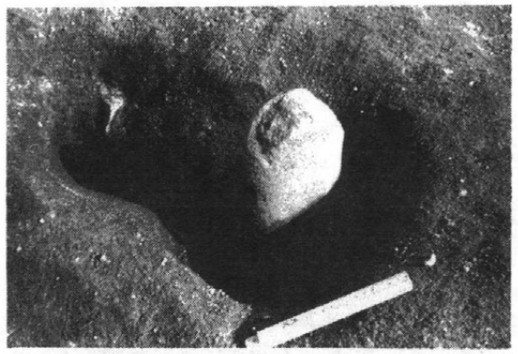
第　２　群　Ⅳ　号（写真９）

方形の縦棺を埋めたとは考えられないもので底部も浅い舟底状を呈す。円形の土坑Ⅷ号は直径110cm砂層に75cm垂直に掘りこむもので桶棺を埋めたと考えられるものであるが、ともに遺物がなく、土葬穴との推定の範囲を出ない。

Ⅲ・Ⅶ号は一部分を調査したのみであり、またm、n17列にみられた上部に列石をもち下部は長さ3.5m、巾70cmの細長い土坑状をなすものについては、砥石、中世陶片、縄文後期土器の出土をみており、おそらく畑の境に捨てられた石の堆積と思られるが性格はわからない。以上のような観点から未調査グリットの発掘が望まれる。

(3) 墳墓第Ⅲ群

第Ⅰ調査区の北東側から第Ⅱ調査区の南西側につながる火葬墓を主体にしたもので、7基の火葬墓と10、11号土坑が第Ⅰ調査区に発見されている。9号より皇宋元宝、28号より咸平元宝と天聖元宝が、また6号住居址のカマド北西側（おちこみがみられる）よりに紹聖元宝が検出されており、16号よりは良質の中世陶器片が底部に入れられていた。12号（写10）には土拡の中心に扁平の石を石碑状に立ててあり、火葬墓形態の特殊なものとみられた。



第 3 群 12号 （写真10）

のとみられた。この火葬墓群は第Ⅰ群と時代的には同じとみられるが形態上に立石をもつ、石を並べる、周囲を石でつめる。土坑のみのものの4分類をもつ多様性のもので火葬墓周辺の未調査グリットの発掘は重要な火葬墓究明の課題をもつものである。

(4) 墳墓第Ⅳ群

第Ⅱ調査区の調査グリットの大部分に発見されており、10基の土坑が検出されている。そのうちに完全に調査されたものは5基で他は1部分を現わしたにすぎない。21号は砂層下の深さ145cmに炭を多く含む黒土層があり、砂層を30cm掘りこんだ土坑であり、遺物は何もなく時代は決しかねるが、特殊な形態をもつものである。14号よりは古銭（字磨滅）を伴出している。

第Ⅳ群 14号（写真11）

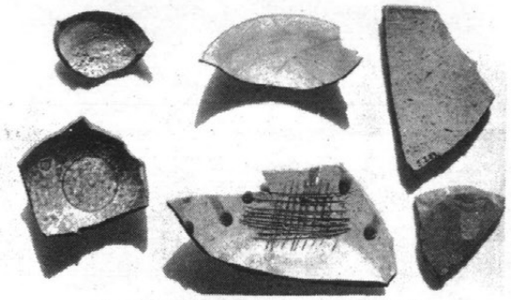
土坑形態には整った楕円形のもの、方形に近いものもあり、出土遺物は古銭、中世陶片を出すもの、縄文後期土器片をもつものがあり、土坑形態と時間的な差を究明する課題が残されており、調査未了の土坑を調査する必要がある。

3. 溝

第Ⅰ調査区f 3に東西に向く60cmの巾の溝があり、i 25、i 23（i 21にはみられない） 第Ⅱ調査区i－2、i 1に連がりi 3で終わる巾60cmの溝と、これに隣りあうようにk 3に巾150cm、深さ150cmのV溝がある。また第Ⅰ調査区g 23に東西に向きカーブするV字溝、i 21、i 23では大V溝に平行する小溝が検出されている。これらの溝は部分的にみられるもので、水路としては考えられないもので周溝の性格をもつものと思われる。溝についても住居址との関連において究明したい。

4. 遺 物

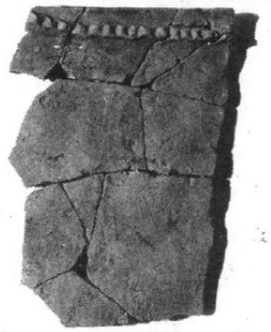
遺跡全面にわたり表層より縄文後期土器片、黒旺石片が採集されており、後期の遺跡と考えられていたが、これからの土器片の多くは磨滅しており、上段にある湯渡遺跡よりの流れこみとみられる。



さつみ遺跡遺物1 （写真12）

表層下中に出土した遺物は多くは中世陶片で雑器類が多い。（写真12）中には良質な灰釉による淡緑色の壺、茶わんの類もみられる。これらの中にまじって青磁陶片、灰釉陶片があり、時代的に平安末にさかのぼる遺構の存在を示すものである。

縄文後期の遺物として注目されるものに、C 9出土の4分の1個体分（写13）がある。口唇部は平で、口縁の下に四方に頂点をもつゆるい山形状に突帯をもち、これに深い圧痕をめぐらすのみで他は無文の深鉢である。



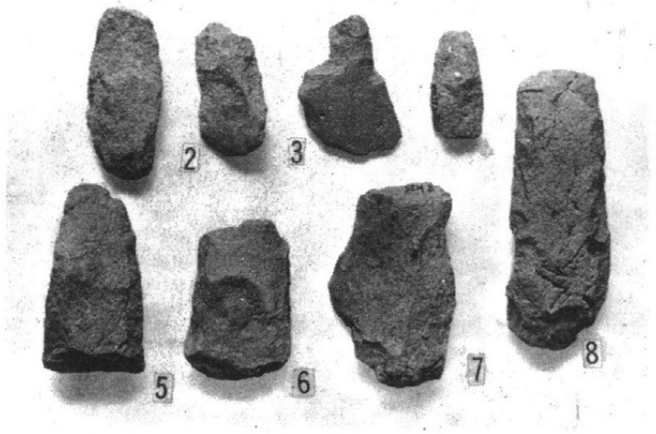
さつみ遺跡遺物2（写真13）

この期の石器として分銅形石斧片（写14の8）がi 25より出土している。

弥生式土器ではⅠ号住居址、Ⅳ号住居址より出土した土器片が弥生後期のものとみられ、Ⅰ号址出土打石器（写14の2）は土ずれの多い弥生式石器とみられる。打石器類は8個と少ないが、i 23出土の大形の鍬形打石斧があり （写14の8）弥生式石器の典型的なものである。写14の3はO 1出土の弥生式の有肩扇状石器の2分の1を欠くものである。

Ⅳ号住居址出土の土師器片は量的に少ないが、国分期のものとみられる。灰釉陶片も僅かにみられておりⅤ号住居址より須恵器片が検出されている。

土器、石器類は極めて少なく、器形をみられるものは縄文後期の土器片のみである。陶器片は多く、器形のわかるものが多い。



さつみ遺跡遺物3 出土石器（写真14）

写真15の１はａ９出土の磨石とみられるもの、２はｍ17　３はｃ５出土で不明の石器である。

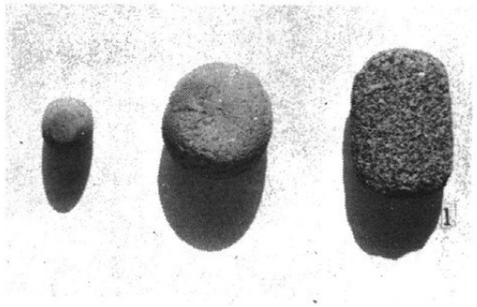
古銭は７枚検出されており次のようである。　（写真17）

	鋳造年代	出　土　地　点
咸平元宝	９９８年	Ⅱｆ－２　28号火葬墓の周辺
天聖元宝	１０２３年	〃
皇宋元宝	１０３９年	Ｃ23　９号火葬墓
紹聖元宝	１０９４年	Ⅱａ４　火葬墓とみられるが未調査
大観通宝	１１０７年	ｎ５　５号火葬墓
不明（磨滅）		ｏ７　３号火葬墓
〃　〃		ⅡＣ11　14号土坑上部

出土土器片、石器をまとめると下記のようである。

縄文式後期土器片100　晩期土器片１
弥生式（後期）10
土師器片20・須恵器片２
灰釉陶片10・青磁陶片４
中世陶器片100　内耳土器片20
山茶わん片４
近世陶器片20

石器・打石斧10、磨石１、砥石３、不明石器２

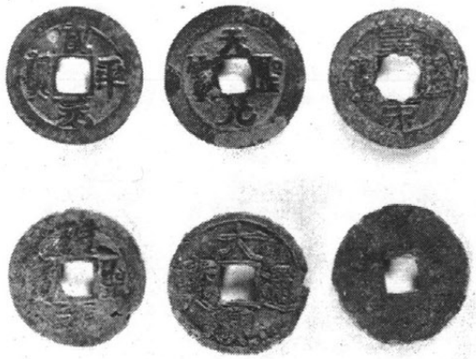


さつみ・遺物４　（写真15）

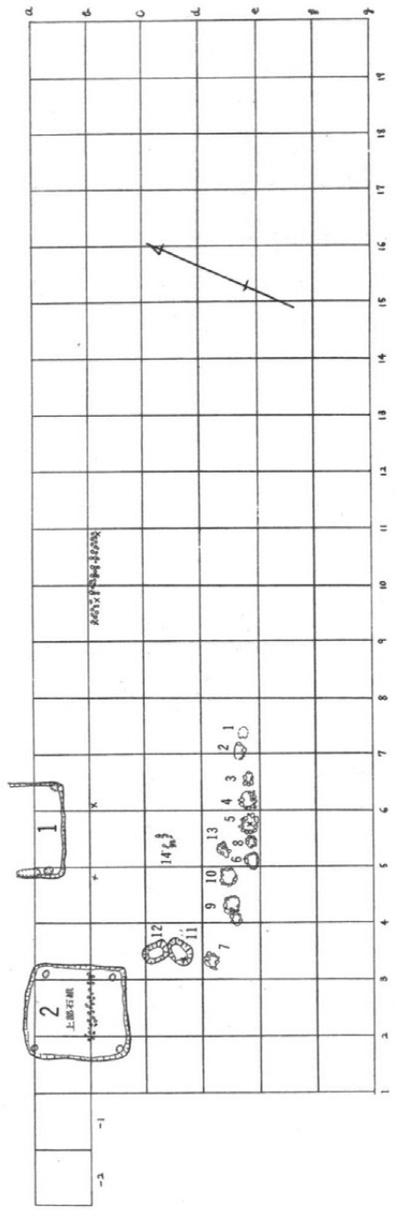
5.　さつみ遺跡の考察

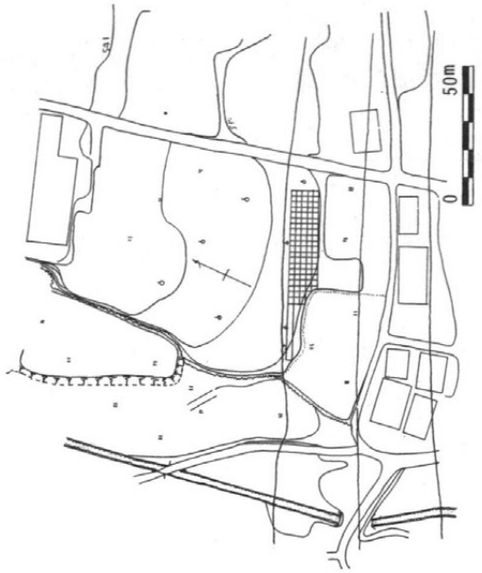
さつみ遺跡の発掘調査は部分調査により、住居址は１部分を調査したのみにすぎないもので７住居址中、６号址のみがプランを知ることができたものである。このため再調査により、その全貌を把握すべきで、このため少なくとも30グリットの調査を必要とする。

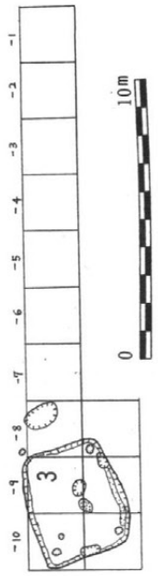
土坑、火葬墓についても同様なことがいえるもので、特に土坑の性格、火葬墓と土葬穴の時間的な究明、分布の状態を知るために67グリットの発掘調査を要するもので、第Ⅰ群25グリット、第Ⅱ群では７、第Ⅲ群では21、第Ⅳ群Ⅳ群で14のグリットは調査することが課題である。

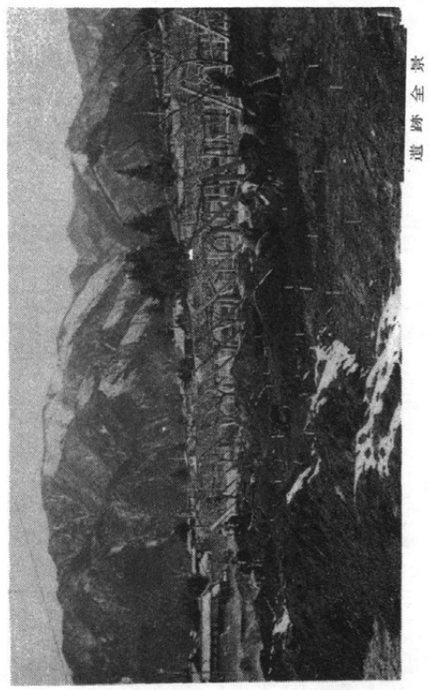


さつみ・遺物５　（写真16）









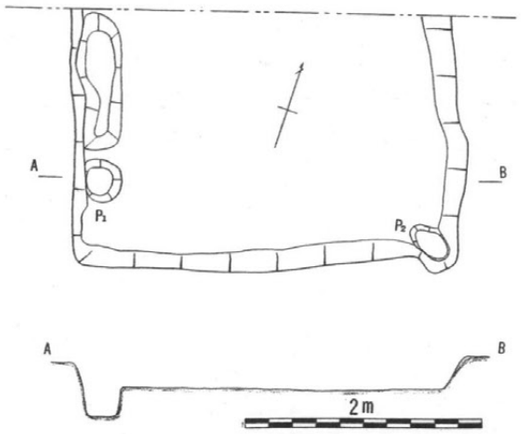
遺跡全景

古屋垣外遺跡・グリット設定図　（図４）

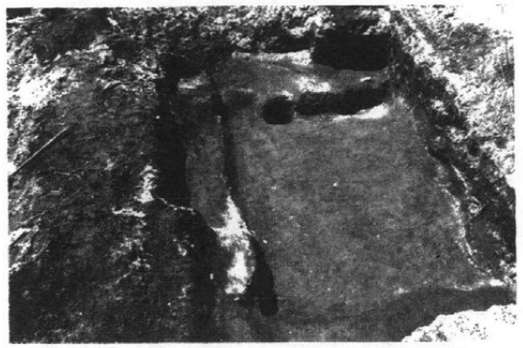
Ⅳ　古屋垣外遺跡遺構及び遺物

1．住　居　址

(1)　1号住居址（図5）　a 5グリットを中心に発見されたもので、北半分は道路予定線をはずれ調査不能となった。南東隅壁上はナシの植穴のために破壊され、遺物はｂ6グリットに混って出土をみた。住居址のプランは東西3.5ｍの隅丸方形のもので砂層に20cm30cm掘りこむ竪穴住居址である。柱穴は南北隅の壁について1個、南壁より40cm離れた西壁に1個があり、4個の主柱穴をもつ住居址とみられ、壁に密着した所に柱穴をもつことは狭い住居址を最大限に利用するための構築方法として注目される。西柱穴に隣りあって壁に密着する120cm×40cmの細長い貯蔵穴があり、深さ10cm～15cmのものである。



古屋垣外　1号住居址　（図5）



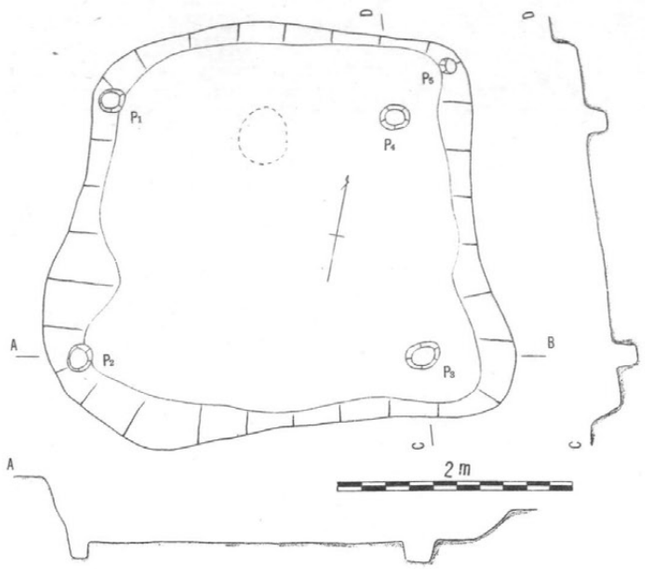
古屋垣外　1号住居址（写真17）

遺物は座光寺原式の鉢型土器片と中島式壺形土器の頸部片に欠山式のカメ形片があり、打製石庖丁1を検出しているが遺物は少ない。座光寺原式を伴出しているが、1号址の時期は弥生終末のものと考えるべきものである。

(2)　2号住居址（図6）　a 3、ｂ3に中心をおくもので地表より黒土層の70～80cm下に氾濫堆積の砂層があり、この砂層にシルト状の土で壁がかためられたのを検出し、これに沿って掘りすすめて発見した住居址である。砂層の下に厚さ5cmほどの黒土層があり、この下に床面がある。プランは、東西3.8ｍ、南北3.4ｍの隅丸方形で壁高20cmの竪穴住居址である。主柱穴4個で南東隅の壁について斜めに南西に向く支柱穴1がある。炉址は住居址の北側3分の1の中央部に深さ5cmの浅い掘りこみをもつ50cm×40cmの楕円形のものであった。遺物は僅かな中島式と欠山式の土器片を検出したのみであるが、弥生終末の住居址と決定づけたものである。

(3)　3号住居址　（図7）　トレンチの最西端にあり黒土層を15cm掘りこんだ竪穴住居址でプランは東西4ｍ、南北3.7ｍ隅丸方形、主柱穴は4個、北東の柱穴は壁上にあり、南西の柱穴は支柱穴をもっている。南壁側には長さ2ｍ、巾20～30cm、深さ7cmの周溝をもつ。

炉址は中央より南によって50cm×37cmの楕円形の深さ15cmの凹をもつ、炉内は多くの炭灰があり、この中から欠山式のカメの口縁部片が出土している。炉址の東側に75cm×50cmの楕円形の深さ10cmの凹があり、炉址であったものが使用されずにあったものか、または容器を置くためのものとも考えられるものであった。



古屋垣外2号住居址（図6）

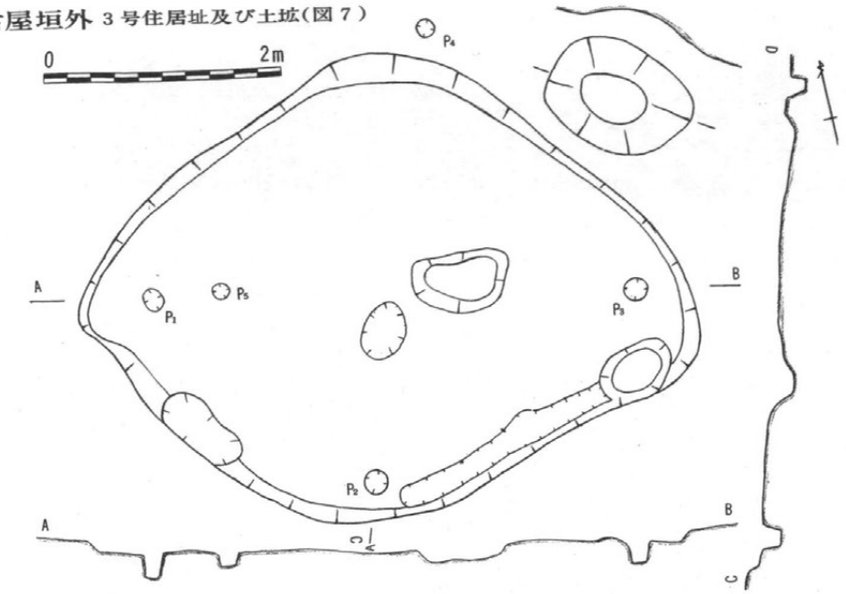
古屋垣外2号住居址（写真18）

貯蔵穴は南東隅に深さ16cm、65cm×48cmの楕円形のものと西壁の中央部に75cm×35cm、深さ22cmの楕円形のものが二個ある。遺物は少なく中島式の壺形、カメ形の土器片に欠山式土器片を伴出している。弥生終末の住居址である。

土坑、住居址の北110cmに125cm×90cmの深さ20cmの土坑がある。高森町月夜平遺跡における例にもこれと同じ形態のものが4住居址にみられている。しかしこの性格については把握するする段階にいたっていない。

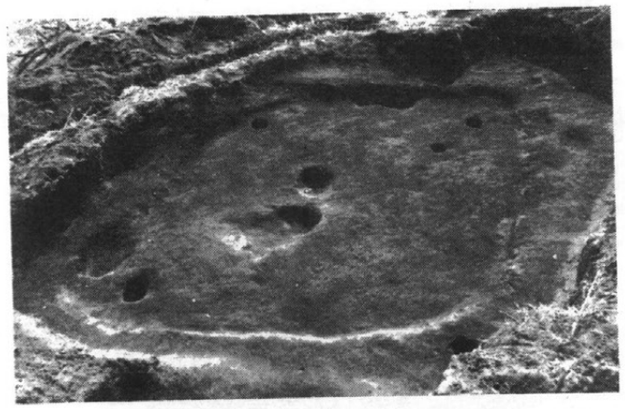
3住居址とも規模は小さく、遺物も極めて少ない。弥生終末期住居址発掘調査例では、飯田市駄科安宅遺跡、高森町月夜平遺跡があるが、住居址の規模は小さく、遺物も安宅遺跡Ｃ1号址を除き少ないことが特徴である。今次調査によって特に山麓、または山麓に近い遺跡においては顕著であることがはっきりした。このことは弥生終末期における飯伊地方の問題点として今後究明すべき課題といえよう。

古屋垣外３号住居址及び土坑（図７）



2．　墳墓群遺構（図８）

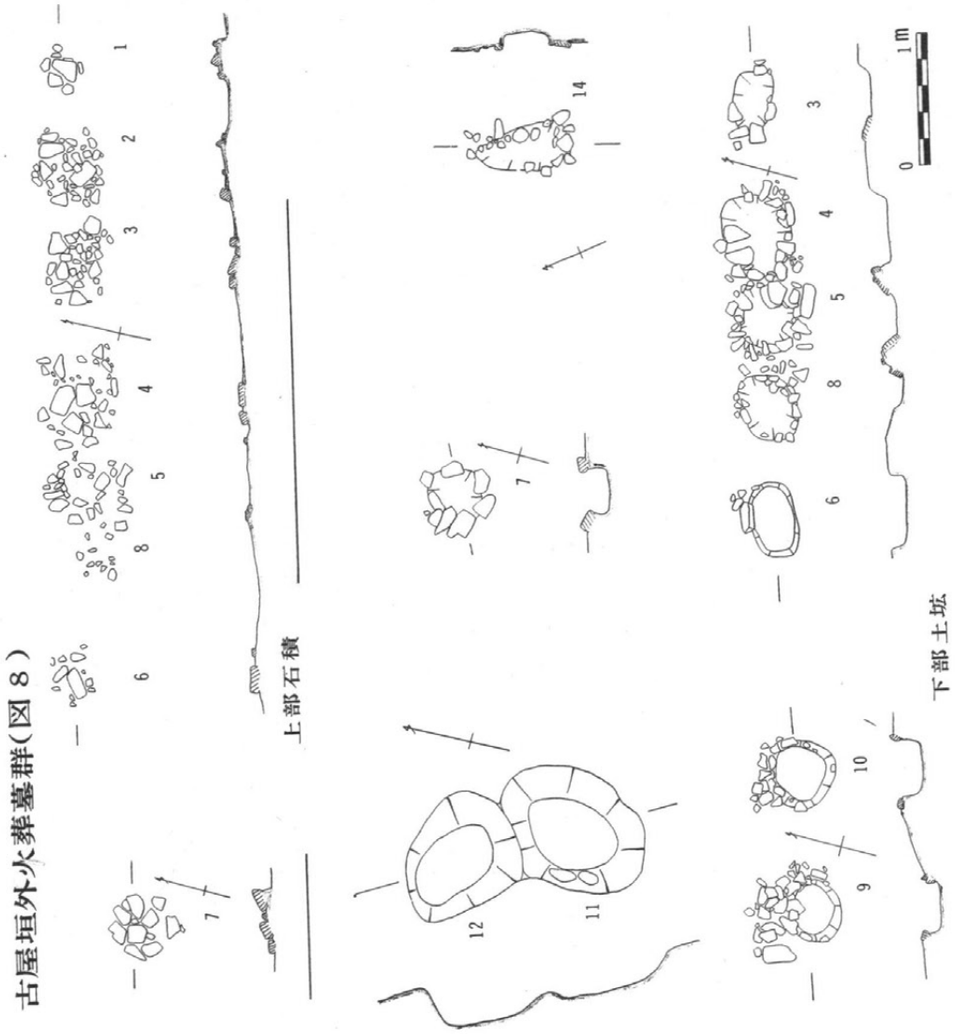
墳墓群遺構はｃ２、ｃ５、ｄ３～ｄ７の各グリットより発見されたものである。それらはきわめて狭い範囲内に集中して存在していた。またいずれの墳墓も黒色土層最下部より土坑状をなすものと、拳大の自然角礫を雑然と配置する配石状態を示すものの二種がある。１号より８号及び10号墳墓は、発見当初より円形を有する配石状態を示すものであったが、特に４号、５号、８号付近においてはその配石状態はきわめて雑然としたものであった。これらの墳墓群は、ほぼ南西より北東に直線的に存在しており、その大きさも長径50㎝、短径40～30㎝を算するものであり、深さもほぼ20㎝前後と同様な規模を示すものである。



古屋垣外　３号住居址（写真19）

火葬墓群　上部石組（写真20）

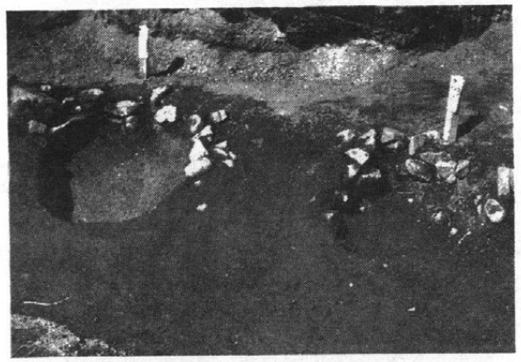
古屋垣外火葬墓群（図８）



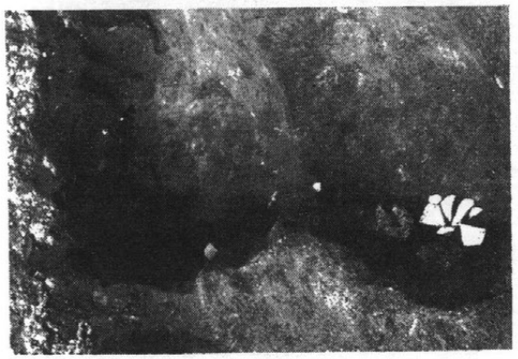
1号墓は、褐色砂層上面に自然石8個をもって円形に配されていたものであり、きわめて小形なものである。また配石下部には掘り込みもなく、自然石を配置したのみであった。2号墳墓も1号墳墓同様褐色砂層上面に構築されたものである。

古垣垣外火葬墓群（写真21）

3号墳墓より4～8号、10号の各墳墓は、褐色砂層をわずかに掘り込みの周辺部に自然石を配置するものの二種が存在する。かかる墳墓はいずれも内部底面より10㎝ほどまでは暗黒色の土が存在し、それより上部は墳墓掘り込み周辺までを拳大の石で円部をぎっしりつめその上部にやや大きな石数個をもって蓋状に置いてある。さらにその上部を拳大の石でマウンド状に若干積み上げて墳墓を構築したものと考えられる。その中にあって9号、10号墳墓は発見当初より、特に北側に多くの自然石を配置し円形の掘り込みが認められるものであったが、北側のみ底面近くまで壁面に拳大の石を嵌込むものであった。またこれらの墳墓群に対し11号12号墳墓は黒色土層最下部より白色砂層まで掘込む土坑状をなし、自然石などをもって構築したものではない。ただ11号墳墓のみ底面近くの壁面に2個の自然石が嵌込まれており、その周辺より中世陶器が出土している。この2つの墳墓は相接しているものであり、11号は12号墳墓によって切られたものである。



火葬墓9号・10号（写真22）



火葬墓11号・12号

これらの墳墓群の中で、自然石を用い構築したものは、その形態、構築方法などより飯田市山本竹佐において調査された大塚火葬墓群と同種のものである。また出土遺物の中に中世陶器類や砥石などから認められる事実から、中世における火葬墳墓の一形式と考えられるものである。またこの種の遺構は、中野市安源寺遺跡においても調査されているものであり、中世における墳墓構築状態を明瞭に示すものである。またこれら墳墓群の有する性格からも中世仏教思想の一様相を知る手がかりにもなる。

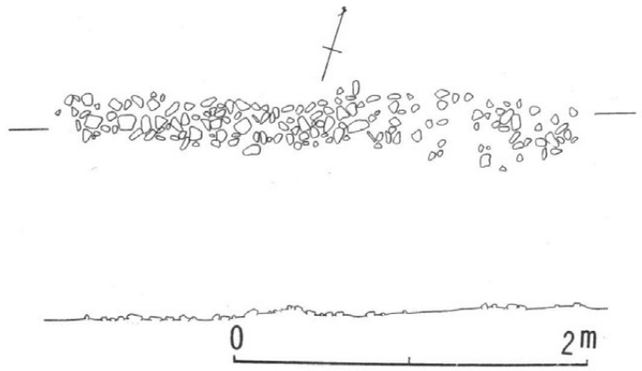
本調査における墳墓群は、きわめてかぎられた範囲内に集中している点、この墳墓は中世における一家族的集団の墳墓として考えられるのである。なお11号・12号墳墓はたがいに切合い関係にあるが、時期的には同じであり11号と12号墳墓の間には、わずかな時間的差が存在するものと思われる。

13号は最後に発見されたもので、ともに土坑壁を石で囲むものであり、14号は浅い土坑を掘り石を並べたものである。

火葬墓14号（写真24）

出土遺物は中世陶器類が墳墓群周辺部より比較的多く認められている。5号土坑底より天目茶わん片、7号土坑底部には古瀬戸焼茶わん片、11号の中からはカメの大破片が4片重なって出土している。その他の副葬品は発見されなかった。なお墳墓群形態をみると、①円形に石を積み重ね土坑をもたないもの。②坑壁を石でかこむもの。③石を並べるもの。④土坑のみのものの4形態に分類される。なおグリットb9及びb10にかけて直線的に自然角礫を配した長さ3㎜巾30㎝ほどの配石遺構が発見されたが、これは黒土中に存在するものであり、その配石状態もきわめて雑然としたものである。また2号住居址上部の黒土中にもこれと近似したものが存在し、これを延長すると直線的につづく可能性がある。またその周辺部及び配石内部からは、近世陶

古屋垣外b9・b10石組（図9）



器類にまじり中世陶器類の他弥生式土器（高杯脚部）などが伴出している関係上これは後世のものと考えられる。

以上墳墓群について説明してきたが、その形態などより中世火葬墓群として考えられるものであり、大塚火葬墓群、安源寺火葬墓群などの例からも中世における火葬墓　の一列として注目されるものである。

3．遺　物

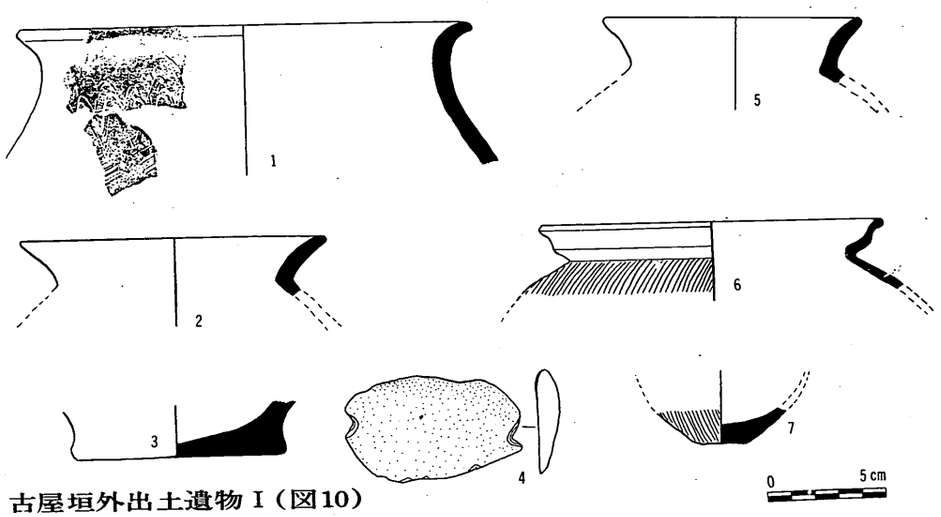
(1)　弥生式住居址出土遺物（図10・11）

1号住居址（1～4，8～10）　1は甕形土器で、口縁部はゆるいカーブで外反し、胴部は張るものとみられる。頸部に波状文を、胴部にかけて平行斜走短線文が施されており座光寺原式(1)の特徴をもつものである。2は壺形土器の口縁部で朝顔花形の開いた口縁をもち、胴部は球状になる安宅遺跡C区・1号址出土の欠山式の大形壺(2)と同形になると思われるものである。3は底部で底からの立上がりが一旦は内側へもどり外反して胴部へ続く中島式(3)　にみられるものである。8は底部に接する部分、9は胴部片でともに櫛状器具による細い条痕が施された欠山式甕形土器にみられるものである。10は4分の1の同心円孤文で、中島式壺形土器にみられるものである。無文の口縁部の小破片が一片ある。この口唇部には浅い刻み文がかすかに残っているものである。器形様式は不明である。この他、ヘラ削り調整をもつ中島式にみられる土器片数点がみられる。

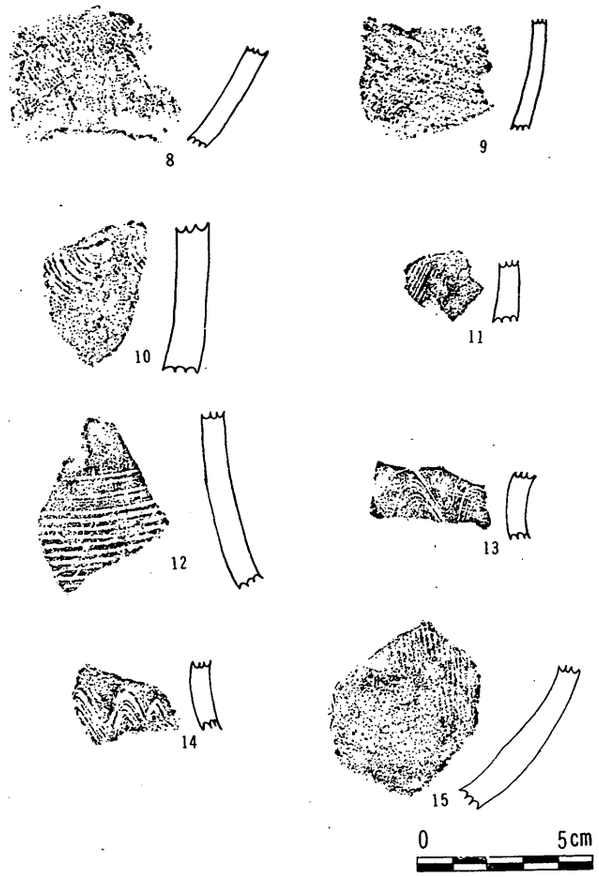
石器は4の打製石庖丁1個のみである。背面に自然面をもつ粗雑な作りで、重量45g、刃部角30°、硬砂岩製のものである。

2号住居址（5・11）　5は2と同様の欠山式壺形土器にみられる口縁部である。11は中島式の甕にみられる平行短線文を施した胴肩部片である。

3号住居址（6・7　12～15）　6は炉址の中から検出されたもので、S字口縁をもち器壁の極めて薄い良質な胎土で焼成は堅い。櫛状工具による細い条線が胴部に斜に施されている。胴部はおそらく球状になるものとみられ台付甕になると思われる。7は坩形の底部で細い条線が斜めに引かれている。12は壺形土器の頸部で横走文が施されたもので、座光寺原式にみられる横走文の下に波状文が施されるものとみられる。13・14は中島式の甕形にみられる波状文が施されたものである。15は6の胴部とみられる。この他、無文のヘラ削りの調整痕を残す甕形の焼成の良い小破片数点が検出されている。



古屋垣外出土遺物Ⅰ（図10）



古屋垣外出土遺物Ⅱ　（図11）

3住居址ともに出土遺物は極めて少なく、主体となる土器は中島式と欠山式であるが、これに伴って座光寺原式の土器が出土しており、この点は今迄の飯伊地方の弥生終末期の住居址出土遺物例とは異なるものである。まな石器は石庖丁1個のみの出土で、これも極めて特異な例といえる。

(2)　中世陶器片

火葬墓群より出土したもので、5号火葬墓よりは良質な天目茶椀が、7号火葬墓では美しい灰釉薬の古瀬戸茶椀の胴部片が、11号火葬墓より同一器形の鉢の大形破片7片が出土している。この鉢も美しい黄土色の灰釉である。火葬墓の石積みの中よりは天目茶わん片、壺の破片等約20点が検出されているがいずれも良質なものである。

(3)　その他

不明の列石中より近世陶片が多く出土しており、これにまじって中世ともみられる雑器類も検出されている。12号火葬墓より砥石1個が出土し、列石中より砥石3個が検出されている。

注1．今村善興　飯田市座光寺原遺跡　長野県考古学会誌第4号　1967年
2．佐藤甦信　安宅遺跡C区　安宅・大島　1969年
3．宮沢恒之　飯田市中島遺跡　長野県考古学会誌第4号　1967年

4. 考　察

今次調査区域は遺跡の南端部のごく限られた１部の発掘調査であったが全面発掘により期の住居址３の調査と中世火葬墓群の全貌を把握できた意義は大きい。

弥生住居址群が調査区の北側の果樹園に拡がることが予想された。

弥生終末期における住居址が他の遺跡の発掘調査例と対比して飯伊地方におけるこの時をつかむ手がかりを得た。

中世火葬墓群についての構築方式について円形に石組をもつ例が明らかになった。　ま副葬がなく、良質な陶器片を埋葬に用いたことに対し、山本大塚火葬墓群との対比におい的または埋葬者の身分差を考えてみる手がかりとなった。

お　わ　り　に

長野県内の中央高速自動車道のコースが決定され一部ではいよいよ工事に入ることにな

しかし、このコースには埋蔵文化財が多く存在することは分布調査で明らかになってい日本道路公団と長野県教育委員会の間にしばしば協議がもたれた。その結果、昭和45年飯飯田さつみ遺跡と古屋垣外遺跡については記録保存することになり、長野県中央道遺跡調設立され、調査会が日本道路公団名古屋支社の依頼をうけて発掘調査を行なうことになっ

遺跡調査会は主として地方の考古学研究者を調査員に委嘱し３月４日より３月３１日ま急に発掘調査を行なった。

さつみ遺跡については部分発掘をなし、遺構の存在が明らかになった場合には再契約しするきまりであったので、今回の発掘では遺跡の全貌は明らかにされ得なかったが、住居中世の墳墓群４を発見した。

古屋垣外遺跡では全面発掘を行ない弥生後期の住居址３と中世火葬墓14基を発見し、下飯田地方の中世墳墓の形態を明らかにし、それが北信のそれと共通点をあることを明らかたことは大きい収穫であった。

ただし、３月とはいえ異状天候の厳寒と連日の吹風と強風の中で行なわれたが、発掘調たって、遺跡調査会の協力と発掘調査員の努力と調査に加わった飯田高校考古クラブなどの奮斗により、期間内に発掘調査の完了し得たことはありがたいことであった。

現場調査から整理、報告書の作成にと、期日に限定があり、無理な仕事を強行したが、成果と今後の見とおしをもったことはよろこびにたえない。

この報告書の執筆は大沢和夫、佐藤甦信、遮那藤麻呂があたった。

さつみ・古屋垣外

中央道埋蔵・文化財発掘調査報告書

印刷　昭和45年３月30日

発行　昭和45年３月31日

発行者　日本道路公団名古屋支社

編集者　大沢和夫　　佐藤甦信

印刷所　飯田市通り町１　秀　文　社